

1 わたしは白系ロシア人? (『哲学は美味しい』)

①朝ゴミ出しに出かけた。コロナで避難してきたのか、この頃は見知らぬ人が増えている。突然、シニアの日本人の奥さんから挨拶された。

“Good morning!”

正統派の英語である。わたしは一瞬戸惑ったが、どう見ても日本人なので、とっさに日本語で返した。

おはようございます。

②狐につままれ、帰って早速妻に話した。妻の話では、イギリスに数年住んでいた、シニアのご夫婦が最近引っ越してきたそう。

旦那は政府の関係機関の偉い人(?)だったらしいが、健康を損なってこの辺に隠遁したという。人との付き合いも淡いこんな山里で、よくそんな情報が入ってくるものだ。妻の地獄耳にも恐れ入る。

③妻はまぜっかえす。

白系ロシア人と間違われたんじゃない。

ほらパパは昔よく外国人と間違われてたじゃない。きっとそれよ。

パパは日本人にしては色白で大柄だし、態度がデカかったでしょ。若い頃から。

④なるほど。そういわれて、ロンドンに住んでいた頃の与太話を思い出した。

英国人ボスのピアスに誘われて、日本大使館でのパーティーに、金魚のフンのようにくっついていった。

知り合いもいないので、ウロウロしていると、中年の大使館員と目が合った。わたしが会釈すると、向こうが話しかけてきた。

“Good evening!”

⑤何と英語! 「エッ何で?」と思ったものの、日本語で返した。

はじめまして。ヤベです。オールドウィッチの法律事務所に勤めています。

そうしたら「日本語がお上手ですね」ときた！

⑥何を馬鹿な。こちとらは、れっきとした日本人だ。オレは秋田弁だってしゃべれるぞ。そう思ったが、おくびにも出さないで流暢な日本語で話し続けた。当たり前だが、彼の英語より、オレの日本語の方がはるかにうまい。それで結局、日本語の会話になった。

⑦その後も日本人の会合に出て、何度かこんな風に英語で話しかけられた。バカバカしいので、よく「先祖はロマノフ家の血を引く白系ロシア人」と笑って江戸弁で話し続けた。さらに「ロマノフ家の高貴な血筋で・・・」と冗談ぽくいうと、さすがに日本人と気づき、日本語での会話になる。

⑧ところが、なかにはガチガチの奴がいて、いつまでもこちらが日本人だと気がつかない。真面目というか、頭が固いというか。ユーモア感覚ゼロでよく海外駐在員がつとまるものだ。ともあれ、こちらは冗談のつもりでも、固い人には誤解されそうなので、その後この与太話は封印した。

⑨年をとると、たった一言 “Good morning” をきっかけに、データベースから昔の思い出を引き出すことができる。そんな他愛のないのお話。

2 わたしはどうも生意氣らしい(『哲学は美味しい』)

①司法修習も終わりに近づいたころ「矢部の卒業後の進路について相談したい」と、検察教官から呼ばれた。会った途端にいわれた。

矢部、お前は検事に向きだぞ。検事を志望しろ。志望すれば、採用はオレが絶対請け合うから。

相変わらず単刀直入。ズバットくる。

②その時「面倒なことになった」とチラと思った。教官相手に断るのは容易ではない。位負けする。何しろ相手は、ベテラン検察官である。マムシのようにしつこい(教官、失礼!)。わたしは若武者。この勝負は？

③強面だがおもしろい教官で、わたしとは相性があった。だが、わたしは検察官向きではない。民間の自由な空気を吸ったわたしにすれば、検察庁は上下関係のうるさい、世間知らずの閉鎖組織。司法官僚として灰色の世界で生きるのはまっぴらだった。

だが、相手は脂の乗り切った検事。まっとうに断っても、被疑者を落とすようにわたしも落とされかねない。何せ相手は海千山千である。

④しかし、わたしとて、だてにサラリーマン生活を送ってきたわけではない。それなりのビジネス交渉術は身につけていた。とっさに一計を案じた。

教官！ 誘っていただいてありがとうございます。

1つ問題があります。わたしは現役合格者より8才上です。その分、社会経験もあるし、知識もあるつもりです。ポット出の連中と同じ給料で働くのは面白くないです。社会経験が評価されないのと同じですから。

だから、8年目の検事と同じ待遇をしてもらえますか。給料もポジションも。

およそこんな調子である。自分でもおかしいと思うが、いざとなると誰にも臆するところがない。変なバカ力が出てくる。若気の至りとはいえ、今思い出しても、自分の神経に呆れる。

⑤予想外のわたしの返事に、教官は絶句した風だった。そして吠えた。

オーオーオー。そうくるのかあ。

うーん矢部。お前なあ、お前なあ、それはないだろ・・・。

うん、それはないよ・・・。

⑥直球の返事を期待していたのに、わたしは曲球のスプリットを投げ返したのだ。

こればかりは、さすがの教官もどうにもならない。上下関係をひっくり返して、8年もの飛び級ができるわけがない。

とはいうものの、教官はすぐにあきらめてくれた。教官はさっぱりした気性で、その後何の後腐れもない。

⑦教官が退任して弁護士になってからは、何度か民事の相談を受け、わたしも経済犯事件で教官に相談した。

昔話になると、決まってあの時のリクルートの話になる。

あの時のお前は生意気だったなあ・・・。本当に吃驚したぞ。宇宙人かと思った。

今まで、あんなふうには任官を断った生徒はいなかったぞ！

⑧そういわれれば、我ながら自分の無謀さに汗が出る。だが、それがわたしである。変えようがない。変えたくもない。

あれから 45 年。教官はお元気だろうか？

3 漂う自画像(『哲学は美味しい』)

①この種の武勇談はゴマンとあるので、おいおい話すとして、わたしの長年の疑問は「自分は何者か？」ということ。

この年になってどうかと思うが、自分なりの自画像がどうもはっきりしない。

②どうやら、わたしは生意気、大胆、無作法、傲慢などの印象が強いらしい。

だが、世間の印象はおそらく間違い。

わたしには臆病さと大胆さの 2 つが併存している。たいていの場合、臆病な反応が先に来て、何日か悩みぬき考え抜いた末に、ふっと割り切り、大胆に行動する。

だが、世間は大胆なわたししか知らない。それに至るまでの、わたしの内心の動きを知らない。

③家族は、わたしが外観とは違い、神経質で臆病なのを知っている（と思う・・・）。

特に妻は、わたしが神経が細く、些細な事で大騒ぎするのよく知っている。

多分呆れているだろう。ただ、妻はわたしよりずっと賢く謙遜だから、口には出さない！

④臆病と大胆のどちらがわたしなのか？ ポイントが 2 つある。

1 つ目のポイント。自分を見つめる時、人はどうしても自らを美化してしまう。自分のよい面だけに焦点を当て、誇大視し、醜い側面は切り捨てる。いわゆるソフトフォーカスである。この作業は無意識のうちに自動的に脳内で処理されるから、誰しも気がつかないうちに理想の自画像を描いてしまう（だが、深堀すると、もともと自分なんてどこにもいないのかも知れない。ただ外部の刺激に従って、アタフタとアクセクと毎日を生きているだけかも知れない）。

⑤2 つ目のポイントは、個人の内心は、他人には見えないこと。

実際の行動に現れるのは、内心の微量な 1 部にすぎない。内心の思いの 99.9%以上は、行動に反映しない。だから、他人はただ行動のみから、わたしを評価する。行動に出るまでのわたしの内面の動きを知るすべもない。

これが「自分への評価」と「世間の評価」が全く異なる理由である。

⑥昔ソクラテスが「自身を知れ」と説いたように、自分を知る事は至難の業である。その一つの理由が、内心と行動とのギャップにある。他人は外見的な行動からわたしを評価するが、自画像を結ぶときは自分の内心の思いが決定的に影響する。

ただ、内心の思いは、極めて自己中心で独りよがりである。それに囚われると、美化されすぎた仮想の自分を描いてしまう。

⑦多くの人は、内心の思いに囚われ「美しい自分像」を正しい自画像と思い込む。

特に、最近の中央の政治家たちにはこの手が多い。

自分は実行力がある、自分のやり方が正しい、反対派はケチをつけているだけだ、などと本当に思い込んでいるらしい。白昼夢を見ているのに、気づかない。自分に酔っている人たちである。

だが、自分ではしらふだと思っている。「大丈夫。オレは酔っ払ってないぞー」といいながら、千鳥足で歩いている。それがおかしい。本当に迷惑な話である。